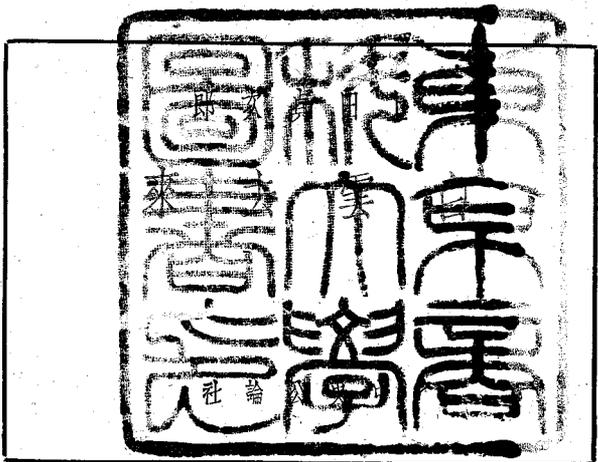


✓ Af-157A



昭和十六年一月二十四日
 上田正一氏ヨリ寄贈



輕井澤の別荘にて（昭和十三年）

著者小影

自處豁然處人
 不獨就有事斬然
 吾可淡然得意
 浩然失意正然

昭和十五年春

貞懋

著者筆蹟



白雲去來目次

自傳……………一

坐誕——父の家系と人物——徳川邸内の生活——飯倉界限のこと——

中學時代——母・伯母・伯父

隨筆・小論……………七

筆のむくまゝ……………元

士族の思ひ出……………元

淋しさを喜ぶ……………三

カンチエンヂユンガ……………三

酒の思ひ出……………元

コーレンコ會……………四

「鷹」によせる一言	一〇
ハイキングと散歩	四
校門を辭して三十四星霜	四
修學の方針	五
修學の方針	五
一橋會員に對する希望數則	三
夏休み前の對話	七
學生に與ふ	七
時局と學生	七
新入學生に與ふ	七
年頭の辭	七
卒業式式辭	七
高文受験者に與ふ	六
大學と社會	八

「企業と社會」宣言	八
大學の社會的使命	三
一橋論叢創刊の辭	六
大學長就任に際して	六
三浦博士を語る	九
村田省藏君と松村光三君の榮任を祝して	四
入學試驗	七
人物養成の問題	一〇
大陸に活躍する如水會員	一〇
サラリーマンと資本主義	二
師友の思ひ出	三
二十八年前の福田先生	三
青淵先生とアダム・スミス	三
アシユレー先生の思ひ出	三

中島權君を悼む	一七〇
加藝敬三君を憶ふ	一七〇
鎌田先生の思想的影響	一七〇
實際家で學者の關さん	一七〇
澤田庸君を憶ふ	一七〇
小倉正平君と私	一七〇
佐久間幸夫君を憶ふ	一七〇
阿久津桂一君を惜しむ	一七〇
東京帝大と金井先生	一七〇
オルトン・ロツクの背景	一七〇
日本及日本人	一七〇
考ふることを好まざる國民	一七〇
日本インテリの弱味	一七〇
一英人の觀たる一九三六年の日本	一七〇

日本人の再認識	一八〇
日本人の生活様式	一八〇
外人の見たる日本の近狀	一九一
日清戦争と日支事變	一九三
人口問題に就て	一九五
國立人口問題研究所生る	一九五
人口増減と妊孕力	一九八

海外遊記……………一〇一

再西遊記……………一〇四

途中所見——パゴダ公園の長烟管——露國の役人——シベリアの秋色——
 モスコウとペテルスブルグ——大都會の人通り——倫敦所見——カーソニ
 ズム——ラーキズム——ロイドザヨーザイズム——英國學者の日本觀——
 開戦前後——主戦論と非戦論——戦争經濟——日本の開戦——英國の陸軍

——英國開戦の理由——英國の赤十字
西遊通信……………二六

東京からモスコウまで——モスコウからジュネーヴまで——モスコウの二日——レマン湖畔の大會議——パリ及びロンドン雜筆——大飛行の成功不成功——協同組合と労働黨——國際經濟會議の反響——フランスの石炭輸入制限——英國の新自由主義——ハイド・パークの貸椅子——鐵道従業員組合の總會——英露國交の斷絶——ベルリンの印象
ドナウに沿うて……………三三

沓掛からハルビンまで——ドナウに沿うて——税關・旅券・兩替——チエコスロヴァキア——住宅市有——南スラヴの國々——攝政ありて國王なし——南スラヴの國——歐亞の大道——目覺め行くトルコ——スタンスプール——モスクの印象——新トルコ共和國
インド漫遊記……………三三

諏訪丸にて——インドの冬——埠頭の群衆——鐵道旅行——ヒンヅー食堂

——カースト——マヂユラの寺——マドラスまで——ボンベイの町——ボンベイ雜感——アジヤンタ——ゲワリオル——デリーとアグラ——ベナーレス——ガンヂナス河岸——カルカッタ——インドの銑鐵——ダーシリンダ——國民會議——サイモン歸れ——非協同運動——婦人問題——寡婦虐待——教育制度

西部カナダ印象記……………四〇
パンフに向ふ——面白い經驗二つ——シャトルの二週間——盛な自動車の利用

太平洋會議の所感……………四三
アメリカを覗く……………四三
滿洲・北支・中支の急行視察……………四三
跋……………四三

「白雲自去來」といふ扁額が中野の家の玄關に掲げられてある。頭山立雲翁の書でかいふものに趣味のない私如きにも好感の持てる書體だ。父は古くからこの言葉を好み嘗て母方の祖父の家に出入してゐた浪人を通じて立雲翁に依頼したのだと云ふ。かくて中野の小宅を父は自ら「白雲居」と稱んでゐた。

今、父の隨感小論を輯録するに當つて私は「白雲去來」を以てその表題とすることにした。蓋し父の生涯は碧空に白雲の去來するに似て、淡々として何物にも囚はれず、また飄々として促へ難き風貌を持してゐた。而してかゝる風格の生んだ學問もさる事ながら、氣樂に書いた小篇には特にこの言葉がふさはしく感ぜられたからである。

此處に收めた小篇は父が専門外の事柄について、文章の末尾に附したそれぞれの新聞雜誌等に發表したもので、もとより纏めて出版する心算など全く考へなかつたものだけ

に甚だとりとめもなく、また時代的にも三十年に亘つてゐる。従つて發表當時と現在との間には社會事情乃至は時代精神に驚くべき懸隔があり、父が本書を編するとしたら多くの加除訂正が見られたに違ひない。が今となつてはありし儘の姿で讀者諸賢に見える以外致方がない。

一の「自傳」は日記によると本年の一月四日から書始めて歿後机上に發見された。續けて六十年の生涯を語るつもりの中學時代で中斷してしまつた。餘り自己を語らなかつた父が自傳を書始め、また書終らずに歿した事も何かの因縁であらうか。

二の「隨筆・小論」は先に述べた雑多の記録をやゝ順序を施して並べて見た。

三の「海外遊記」は數度の海外旅行記である。讀まれゝばわかるやうに「再西遊記」は父の二度目の外遊で、前大戰の興味ある記録である。「西遊通信」は昭和二年の國際經濟會議出席の時、「ドナウに沿うて」「印度漫遊記」は何れも昭和三年より四年にかけての旅行の記録である。其後バンフ（昭和八年）とヨセミテ（昭和十一年）の再度の太平洋會議參加の爲の小洋行の記録が續き、最後が昨昭和十四年の支那視察だつた。

父は自分で長生きをするつもりでゐた。臨終の床となつた慶應病院に於てすら、盲腸

手術後丸二日目にガスが出て、ホッと一安心した時に「盲腸だけで癒つては濟まないやうだが、どうやらこれで十五年は生き延びたらしいな」と語つて附添ひの私達を笑はせた。若しこの父の希望が實現したら、恐らくもつと面白い隨筆や、もつとのんびりした旅行記が得られたと思ふのは、私のかくあり度きを願ふ感情であらうか。

それが既になはない今、こんな本を作りましたと云つて父に見せたら、喜ぶでもなく、非難するでもなく例の微笑を口邊に浮べて「お前も、もの好だな」と云はれさうな氣がする。

終りに當つて本書の集録については殆んど全部を小田橋兄に負つてゐる。また、田中西二郎兄からも貴重な御助力を受けた。記して感謝の意を表する次第である。

昭和十五年十一月

上 田 正 一



白雲 去來 ㊦ 定價貳圓五拾錢

昭和十五年十二月十五日印刷
昭和十五年十二月二十日發行

著 者 上 田 貞 次 郎

發行者 木 田 開

東京市麴町區
丸之内二の二

印刷者 大 橋 松 雄

東京市小石川區
久堅町一〇八

東京市麴町區丸之内二の二
丸之内ビルディング五八八

電話丸之内五三五―八
振替口座東京三四

發行所

中央公論社